

「大正末～昭和戦前期の女子高等教育に関する資料のデータベース」作成に関わる研究

学芸学部 国文学科 白川 哲郎
 学芸学部 教養教育事務センター 竹内さおり
 田辺聖子文学館 住友 元美

本研究は、2003年度以来進めてきた「樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用」「大正～昭和戦前・戦中期の女子教育関係資料のデジタルアーカイブ化とその基礎的研究」「戦前期女子高等教育機関の家政教育資料のデジタルアーカイブ化とその歴史的研究」を継承するものである。

平成22(2010)年度は、前年度までに引き続き、ブックスキャナーを使用して樟蔭学園各校の卒業アルバムのデジタル化を継続した。また、樟蔭女子専門学校に関わる各種資料のデジタル化にも着手した。

このうち家政教育関係の資料に関しては、昨年度の樟蔭女子専門学校家政科の試験問題の検討に続いて、同校技藝科の試験問題について翻刻と分析を行い、その結果を白川が「十五年戦争期の女子専門学校『裁縫』試験問題」(『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第1号、2011年)として発表した。

ここでは、①技藝科が「裁縫」の中等教員資格に関わるものであったことから、「和裁」「洋裁」などの実技に大きな比重がおかれていた点、②デッサン・図解などを求める出題が多くなされていることから、単に裁縫技術だけでなく、和服・洋服制作の前提となる図を描く技術の習得も重視されていたと考えられる点などを指摘した。さらに、ヨーロッパで学んだ大橋富枝(トミエ)氏が教鞭をとっていた事実からは、当時の樟蔭女子専門学校の洋裁教育が、最先端かつ高度な水準にあったと推定される点についても確認したところである。また、太平洋戦争中の1942年に決定され、女性に対して着用が勧められた「婦人標準服」、あるいは「モンペイ」が素材として取り上げられ、その制作に関わる出題がなされていることから、実技重視の「裁縫」試験問題においても、戦争の影響が見出される点についても指摘した。

また、昨年度その分析に着手した樟蔭女子専門学校の『教務日誌』については、2010年度国文学科歴史

文化専攻開講科目「歴史文化総合研究A」においても取り上げた。授業では特に、太平洋戦争中の樟蔭女子専門学校の状況の分析を深めることを目標として、1941(昭和16)年度以降の『教務日誌』の翻刻、分析作業を行った。その結果は未だ不十分な段階にとどまっているが、今後いっそう分析を進めて、その成果を報告したい。

上記に加えて平成22年度には、本研究を核として、共通教育科目で自校教育科目である「樟蔭の窓」の教科書を作成したことを特記しておきたい。「樟蔭の窓」の教科書作成は、平成22年5月に白川がその依頼を受けた。本研究および前記の共同研究の成果をふまえて、白川ならびに住友が中心となり、樟蔭学園の創立から、大学の直接の前身となる樟蔭女子専門学校時代、さらには戦後の大阪樟蔭女子大学となってからの歴史を中心的な内容とする「樟蔭の窓」教科書の作成にあたった。年度末の平成23(2011)年3月には、B5版ブックレット型全158ページからなる教科書が完成し、同年4月1日付で刊行された。刊行された教科書は、平成23年度春期に開講された「樟蔭の窓」で教科書として使用された。

ところで、これまでに本研究等においてデジタル化した画像については、学内公開を目指してきたが、本年度においてもそれを果たすことができなかった。これまでの過程を振り返って言えば、公開は学内のみであっても本研究に携わる者の努力だけでは果たすことができないことが現実である。公開方法について、学内におけるより高次の次元での検討を求めて行くことにしたい。

今後は、ブックスキャナーのいっそうの活用を図り、学園所蔵資料のデジタル化を促進すると並行して、デジタル化が終了した資料の公開の方途を探りたい。さらに、それら資料(群)の分析についてもいっそう深化させて行きたい。